



Title	フクロウの書いたラブレター : お伽草子の恋文
Author(s)	柴田, 芳成
Citation	日本語・日本文化. 2013, 40, p. 23-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50772
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フクロウの書いたラブレター

——お伽草子の恋文——

柴田 芳成

一

近代以前、恋の作法として、その始まりには手紙のやりとりがあった。本稿では、中世から近世に作られ、享受された物語群「お伽草子」にみられる恋文をめぐる様相を見てゆきたい。

お伽草子の作品には、公家や武家、僧侶といった古代以来の物語人物に加え、庶民や異類（動植物や人間以外の存在）までもが登場し、物語の総数は四〇〇篇をこえるとも言われる。物語の中の手紙は、人と人、あるいは人と動植物、さらには動植物同士の間で交わされることになる。その中には、自分の思いを誠実に相手に伝えようとする手紙がある一方、その人が自分にふさわしい相手かどうかを試すため、いわゆる「大和言葉」で文飾を尽くし、相手の教養や能力をテストする場合もある。それらの詳細はいまは措き、ここでは本気ゆえの熱烈さと恐ろしさを合わせもつ、フクロウが書いた恋文に焦点をあて、その手紙の位相を考えてゆく。

いま取り上げる『ふくろふ』は、鳥たちの恋と、それをきっかけにした出家が語られる、お伽草子の中では「異類

物」と称される作品である。その物語は次の通りである。

八十三歳の老ふくろうが若いうそ姫を見初め、山雀に恋文を託し、薬師に恋愛成就を祈願する。うそ姫からの返事を見したふくろうはその内容に落胆するが、夢に現れた薬師がふくろうの読み誤った謎言葉を解き明かしてくれ、二人は契りを交わす。噂を聞いた他の鳥たちもうそ姫に歌を送る。以前からうそ姫に懸想していた驚は二人の關係に怒り、うそ姫は討手に殺される。自害を考えたふくろうであったが、みみずくに止められ、剃髪して諸国を巡り、うそ姫の菩提を弔った。

この中のフクロウの手紙を次に掲げる（A～Fは私に付した）。

Aさてさて何にとりてか、高天の原によそながら見初めしよりこのかた、何とやらん心の内の乱れ髪、思ひの種とな□□□□（底本破損・國學院本「りにけり」）。入江に近きあま小舟、こがれてものや思ふらん、なにしに君をみくまの、音無川の淵瀬にも、沈み果つべきとは思へとも、君に名残やをし鳥の、思へば命長らへて、神や仏の恵みにも、頼むかりねの声を聞き参らせんそのために、かき集めたる藻塩草、うつつにも見る旅寝の小車の巡り会はんと思ふ君、思ひしことの葉草こそ、例へん方もなかりけり。

Bされば浮世のその中に、限りあらざることはなし。ものによくよく例うれば、深山の木の葉、空の星、岸打つ波と真砂をば、数へば限りありぬべし。そのほか、唐土、天竺、我朝、きらい、高麗、けいたん国、三千大世界の畜類も、虫獸に至るまで、数へば限りありぬべし。法華経は一部八卷二十八品。文字の数は六万九千三百八十四字に積もれり。大般若経は六百卷。文字の株は五十九億四十八万字に積もれり。東方朔が九千歳、龍智和尚が一十歳、浦島太郎が七百歳も、限りあるよし承り候へども、君を思ひしことは限りなし。

Cのものによくよく例うれば、春の花、秋の月、衣通姫か、皆鶴か、小野小町か、毘沙門の妹吉祥天女か、松浦姫。紫式部か、小式部か、和泉式部か、小督局。大職冠の乙姫、玄宗皇帝の三千人のその中に、第一の後楊貴妃、源氏六十帖の女房たち。このほか優女数々多しと申せども、君に及ぶ人はなし。

Dされば、古き歌にも詠まれたり。

情けには賤しき袖はなきものを離らさで宿れ宵の月影

と詠みをかれけ

んも、かやうの思ひよりも始まれり。上は玉楼金殿、下は賤が伏屋まで、野に臥し山を家とする虎狼野干の類ひまで、情けはありとこそ聞け。一切の生類のその中に、この道知らぬものはなし。かやうに申す言の葉を、ただ大方に思すなよ。御返事なき物ならば、浮世は不定の習ひ、互ひに消え果て参らせて、今生にての怨念、又来世にての恨み、生々世々に至るまで、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、この六道を歩かんと、微塵程も離れずして、くるりくると追い巡り、憂きも辛きも、後の世にて申すべし。もしこのこと上見ぬ驚様へ漏れ聞こえ、死罪に及ばんそのときは、死出の山、三途の川を越すときに、手に手を取り組んで、刹那が間にうち渡り、閻魔の庁に参りつつ、阿防羅刹に呵責せられんことども、恨みとさらに思ふまじ。

Eさてさて此こと、申し伝へんそのために、生滅滅の鐘を聞く、八声の鳥をうち過ぎて、是生滅法の鐘朗々とうち響き、はや東雲に立ち明かしつつ、ついにいつとも見へもせず、君ゆへまことの科もなき、神や仏を恨みつつ、君ゆへ身をもやつれそひ、人目を包むことなれば、あはれと問はん方もなし。かかる思ひを信濃なる浅間の嶽に立つ煙、胸よりや立ちぬらん。花に三春の約あり。いかで情けを懸けざらん。

Fされば浮世の習ひには、風になびく篠竹も胡蝶に親しむ習ひあり。水に埋もるる浮き草も螢に一夜の宿を貸す。虚空を照らす月だにも、桂男に宿を貸す。一通り一叢雨の雨宿りも、他生の縁と承る。一河の流れを汲むことも、他生の縁と聞きぬれば、及ばぬ濃いをする人は、神もあはれと思すらん。数ならぬ我が袖の乾く間もなきうき草の、苔の袂も朽ちぬべし。待つことはりもかれがれに、なりゆく袖もしら雲の、立ち迷ひ行くありさまにて、筆を留め申す也

やや長い引用となったが、この長さこそがフクロウの熱い思いのなせるものともいえるだろう。では、手紙の冒頭部から順に、その内容を確認してゆこう。

Aは、うそ姫に恋したきっかけから語り始め、その思いのひとつかたならないことが、掛詞をふんだんに用いて述べられる。穏当な書き出しといえるだろう。Bでは、世に知られる数量の多いものごとを列挙した上で、自分の思いはそれ以上に限りないものだと言える。お伽草子にしばしばみられる「物尽くし」表現である。Cも同様に物尽くしで、著名な美人を並べ立てて、あなたはそれ以上だと持ち上げる。Dが、この恋文の特徴となる箇所であり、ラブレターの中にあって異様な脅迫となっている。すべての生き物は恋をするものであり、その思いを邪険にするようなことがあれば、死後もつきまといやうぞという脅しである。そして、Eでは我が身のつらさにふれ、Fで念押しをしてまとめる。自分が恋した相手、自分の思いに応えてほしいと思っている相手に対して、Dはやはり異常な内容といえるだろう。

二

恋文の中の脅しということについて考えてみたい。自分の気持ちを伝えたいばかりに、思いあまって恋した相手を脅しつけるような手紙を送るようなことをする者がフクロウのほかにもいるのかどうか。

それが、いるのである。『玉虫の草子』にそのような例がみえる。この作品もまた、虫たちの恋愛を扱った「異類物」と称される一篇であり、諸虫が玉虫姫に手紙を送る。多くの虫は、自分の気持ちを素直を綴っている。たとえば、蟬の左大臣の場合、

過ぎにしころ、姫君を一目見参らせ候より、心空にあこがれて、有明のつれなき命もはや消急参らせ候とて、一

首かくなん、

空蟬のもぬけの衣脱ぎ置くぞただ君故と思ふ世もなし

恋しさのあまりに死んでしまいそうだという心情を訴えている。しかも、蟬は紅の花を添えてこの恋文を送ったとされる。内容も送り方も、ともに作法に則ったものといえるだろう。これに対して、疣虫（カマキリ）入道の恋文は次のようなものである。

畏れなる申し事に候へども、この道には高きも賤しきも、老いたるも若きも、思ひ惑へることはなし。かく申す入道に御なびき候へ。一は御利益、二には人の思ひを懸かり候ひては、末の世の障りとなるべし。……いはんや、姫君の御なびき候はずは、いかにあるべきとて、数多の虫を頼み、押し寄せ奪い取り申し候はんととき、われら恨み給ふなよとて、一首かくなん、

疣虫のいふこと聞かぬ玉虫はいかなる鳥の餌ともなれかし

フクロウの場合と同様、恋は身分や年齢に関わらないのだと宣言した上で、自分の思いが容れられないときには、拉致することもありうるぞと迫る。自分の言うことを聞かないなら鳥にでも食われてしまえという和歌も、とても恋しい相手に送る内容とはいえない。

フクロウは、「不孝鳥」（観智院本類聚名義抄）、「不祥ノ鳥也、長スル則其ノ母ヲ食フ」（書言字考節用集）などといった説明が辞書にあり、よいイメージの鳥とは見なされていなかったようであり、文学作品中においても不気味なイメージがつきまといつていた。³⁾ 疣虫の場合もまた、雅ではないというイメージが関わっているであろうが、加えて入道という立場も多いに影響していると思われる。『ふくろふ』では、年よりと若いうそ姫という設定であったが、『玉虫の草

子』の僧籍にある者と年若い姫君という取り合わせも恋愛譚の極端なタイプとして取り上げられやすい。彼らはともに、普通に思いを述べるだけでは見込みがないこと、自らの立場の不利を自覚していたからこそ、その裏返しとして強要するような手紙を認めることになったとも考えられようか。

ただし、ここで注意しておきたいのは、『ふくろふ』も『玉虫の草子』もいずれも、「異類物」作品であるという点である。これまでのところ、人間同士の恋愛を描いた作品で脅迫にまで及ぶ恋文は確認していない。やはり、求愛する方法としての脅しは異常なことであり、通常の人間同士の関係においては、相手に恐怖感を与えるようでは、恋の成就など見込めないと判断されたのであろう。

では、フクロウや疣虫が自分の思いを告げるために、脅しという手段を使ったのは、彼らの異常性に求められるだろうか。お伽草子の物語世界で、視線を少しずらせば、次のような描写に行き当たる。

南無大慈大悲の多聞天、是より北の方七千八百里のあなた、三十三天竺の仏法を修行し、衆生の願を満てんと御誓ひ渡らせ給ふ御事なれば、定平が願を成就ならせ給へや。それかなはぬものならば、御堂をも仏をも焼き払ひ、定平自害をして魔王となるべし。目のあたりに仏の御利生を現し給へと肝胆を砕き祈り給へば（『貴船の本地』）

南無薬師十二神、願はくは自らに男子にても女子にても、子種を一人授けさせ給へ。その願成就するならば、矢矧の家に七つ候ふ宝物を、一つづつ次第次第に参らすべし。まづ一番に、紺地の錦のまぼりを六十六尺の掛け帯、五尺の鬘、八花形の唐の鏡六十六面、十二の手箱添へて参らすべし。……男子にても女子にても、長者をあはれと思ひ召さば、子種一人授け給へ。これを御用ひ候はずは、かの御堂の内にて腹十文字に掻き切り、腸つかんで薬師に投げかけ、荒人神となりて、参る人に障碍をなし候はん時、長者を恨み給ふなど、深く祈誓申しつつ（『浄瑠璃十二段草紙』）

『貴船の本地』は、扇に描かれた女性に会いたいと中将が鞍馬寺で祈る場面、『浄瑠璃十二段草紙』は、三河国司夫婦が薬師如来に申し子を祈る場面である。いずれも、自らの切実な願いを訴え、それがかなわない場合には、それぞれの仏に対してかなり手荒な処遇をするという決意（傍線部）を述べて、その要求を聞かせようと迫っている。神仏に対する場合と、恋しい相手に対する場合とは、もちろん心情も異なるであろうが、フクロウにしても、疣虫にしても、その強引なまでの訴えの背景には、こうした神仏への要求に通じるものがあるのではないだろうか。

三

次に、フクロウの手紙を受け取ったうそ姫がどのような反応を示したかをみてみよう。使いの山雀が手紙を取り出したところ、うそ姫は受け取らずに山雀の方へ投げ返した。内容以前に、受け取ることを拒絶したわけである。うそ姫はその理由を次のように語っている。

まことによくよく聞き給へ。年ごろ、上見ぬ御方より、様々の御ことの限りあらねども、御返事も申さず候へども、そもじの御使ひにましまして、こと仮初めの水茎もいかではかなく漏らすべし

それは、以前から自分を口説こうとしている驚への配慮ということであった。とはいえ、山雀のたつての頼みということで、返事に及ぶ。その返事の初めの箇所を引用する。

あからさまなる御言の葉、まことに水茎の跡、打ち置きがたく眺め参りて候。さては数ならぬ身に心をかけさせ給ふかや。返事に及ばず候へども、文の中おそろしく思ひ参らせ候ひて、こと仮初めの申し事にて候へども、我

が身はいやしき者にて候へば、そもじは葛城山の神の縁にてましませば、まことしからず思ひ参らせ候。……

自らは謙遜し、相手を立てる、たしなみのある書きぶりといえるだろう。手紙はこの後、謎言葉に続いてゆくが、いまは省略する。右の引用中に、「文の中おそろしく思ひ参らせ候ひて」とあり、これが直接的には、ふくろうの手紙のD（脅迫文）を指していると読めなくもないが、そもそも、脅迫などがなくとも他人が自分に向ける好意は「おそろしい」というとらえ方があった。さきにみた疣虫の手紙の中にも「二には人の思ひを懸かり候ひては、末の世の障りとなるべし」とあったが、同様の表現はお伽草子作品に散見する。

あら心強や、人の思ひは一念無量劫まで罪深し、情けの道を知らざるは蛇道の苦を受け、（『秋月物語』）

人の思ひほど恐ろしきものはなし（『西行』）

人の思ひの積もる行く末恐ろしさよ（『はにふの物語』）

思ひの末の残りなば、君が身の上いかにせん、せめて手ふれししとて、御返事給はらば、御うれしくあるべし（『をいぜ』）

右に挙げた例のうち、『をいぜ』こそ「異類物」であるが、その他はすべて人間同士の恋愛に関わる場面からの引用である。脅迫にまで及ぶのは極端なものとして避けられもしたであろうが、「人の思ひ」の恐ろしさは何も動植物による擬人物語に限るわけではなく、お伽草子を手に使っていた人々の実感として、人間関係あり方としても考えられたということである。そして、その思いが明示される恋文に対しても、やはり同じように、「おそろしい」との見方がされたであろう。

では、そうした「人の思ひ」につれなくした場合、どのような事態が引き起こされるのだろうか。

あらつれなの御心や、情けの道を知らざるは畜類にひとし、……人の怨念に引かれ、蛇道に入り給ふべし……さりとては、一筆の御返しあれ(『秋月物語』)

古へ、美しかりし人の思ひを晴らさざりしは、あるいは鬼となり、あるは物に狂ひて(『秋月物語』)
ある女房の申しけるは、かかる歌の御返事なければ、七度、口なき虫に生まると承ると申しければ(『敵島の本地』)

返歌せぬは七生舌なし(『鴉鷺物語』)

人の方より文を得て、返事をせぬ人は、来世にては深き咎と承り候(『鼠の草子』)

人から懸けられた思いにより、蛇道に落ちる、あるいは鬼、物狂いとなるといい、口なき虫、舌のない転生などという深い科を被るという。多くの場合、これらの言葉は、手紙の取り次ぎ手(乳母など)が、手紙の受け取り手(姫君など)に対して、助言する場面に語られる。『秋月物語』の引用に示したように、「だからこそ、返事をしてあげない」と話は進み、物語の中の恋愛が、良い方にも悪い方にも、動き出すことになる。

フクロウの書いた手紙には、ここに取り上げた脅迫(D)以外の部分(ABCEF)のそれぞれにも、美文調や物尽くしなど、その様相をほかのお伽草子や物語作品と比べて検討することによって、作品の背後にある世界の縦横への広がりやうかがってゆける問題がある。右の引用では省略したが、うそ姫が投げかけた謎言葉が、そのまま『西行』や『朝顔の露の宮』とも共通することも、それをほのめかす例となっている。

お伽草子作品の中に現れる恋文を通して、物語を手にした人々の思いを考えると、本稿はその端緒として、フクロウの手紙をきっかけに、恋文の中の脅迫と、その背景にある世界を読んでみようを試みたものである。

注

- (1) 大和言葉については、『お伽草子事典』『大和言葉』項（徳田和夫執筆、二〇〇二年・東京堂出版）、徳田和夫「恋の謎かけ」（週刊朝日百科世界の文学 29 日本 I 9 「お伽草子」、二〇〇〇年・朝日新聞社）に簡潔にまとめられている。
- (2) 本文は京都大学附属図書館蔵（寛永）刊本（『京都大学蔵むろまちものがたり』9 所収、二〇〇三年・臨川書店）により、私に漢字をあて句読点を施すなど、表記を改めた。このほか、本稿中でのお伽草子作品の本文引用は、『室町時代物語大成』（角川書店）により、表記については同様の処理を行った。
- (3) 『源氏物語』『夕顔』には、「松の響き木深く聞こえて、けしきある鳥のから声に鳴きたるも、ふくろうはこれにやとおぼゆ」とあり、夕顔が亡くなった不穏な雰囲気の中、光源氏は辺りから聞こえてくる正体不明の鳴き声をフクロウかと推測している。また、『鴉鷺物語』では、フクロウ自身が「我が体が、かりそめにも白昼に立ち渡れば、鳥、希代の不思議を見つけたる様に、集まり喚き、叫び笑ひ、心得がたし。無容儀なればとて他を卑しむべきにあらず。……年たければ通力出でて、人をたぶらかす事天魔のごとし」と「無容儀」であること、年たければ通力を持つことを述べている。
- (4) 岩下均「古典文学の蠅螂」（『虫曼荼羅』二〇〇四年・春風社）参照。
- (5) 拙稿「お伽草子の説話引用態度——志賀寺上人説話を通して——」（『京都大学国文学論叢』第四号、二〇〇〇年六月）
- (6) 佐藤弘夫『起請文の精神史』（二〇〇六年・講談社選書メチエ）参照。中世においては、神仏と交渉する意識のあったことがうかがえる。
- (7) 葛城山の神とは、自分の姿を恥じて夜に活動したという一言主神のことであり、夜行性という点でフクロウと共通し、さらに葛城山は修験道の場であり、それとフクロウとの関わりを指す。

〔付記〕

本稿は、第9回 国際日本語教育・日本研究シンポジウム（平成二十四年十一月二十四日、香港城市大学）にて、「お伽草子作品にみる恋文——日本中世・近世の恋愛作法——」の題で行った口頭発表に基づきます。

The Love Letter from the Owl

Yoshinari SHIBATA

In the tale of “Fukurou”, the old owl wrote the love letter to the bullfinch, the princess of birds. He wrote how beautiful she is, and how much he loves her. But it is not only that. He wrote if she would not reply to his love, he would follow her all the time. It will be unusual to threaten a sweetheart, but in other otogisoshi-tales, we can find some same examples. Besides, in otogisoshi-tales, the characters sometimes threaten the gods and Buddha. So from this view point, I would like to consider the mentality of medieval Japanese people.